

《新刊紹介》

Stéphane Benoist, ed., *Rome, a City and Its Empire in Perspective: The Impact of the Roman World through Fergus Millar's Research*

Leiden: Brill, 2012, pp. viii+211.

藤 井 崇

オクスフォード大学ローマ史欽定教授を務めた Fergus Millar は、学問への長年の貢献を称えられ、2010 年 6 月、英国女王よりナイトの称号を授けられた。本書は、ちょうどこの叙勲と同じ時期に、フランスのリールで開催されたセミナーの記録である。このセミナーは、Millar の業績——帝政システム研究・共和政研究・ローマ帝国近東研究——を振り返り、それがいかに受容されたかをまとめ、将来のさらなる研究への展望を得ることを目的としていた。このセミナーの参加者を中心に編まれたのが本書であるが、その本体部分の構成は以下の通り（論文番号は評者が便宜的に付けたものである）。

1. Stéphane Benoist「ファーガス・ミラー：都市の歴史家」
2. Frédéric Hurllet「ローマの民主政？どのような？：ミラー（とヘルケスカンプ）を再読して」
3. Francisco Pina Polo「共和政ローマにおけるコンティオ（集会）、アウクトリタス（権威）、そして言論の自由」
4. John Ma「ビッカーマンの *Institutions des Séleucides* を再読する」
5. Peter Eich「中心と周縁：ローマ帝政期の行政コミュニケーション」
6. Clifford Ando「ローマ時代のローマ都市」
7. Fergus Millar「コンスタンティヌスからマホメットまでのローマ帝国近東地域：研究プロジェクト報告」
8. Philippe Blaudeau「公会議史料とローマ帝国の歴史：ファーガス・ミラーの解釈」
9. Jean-Baptiste Yon「ローマ・ビザンツ期近東における言語の複数性と文化の複数性」

このうち、第 1, 2, 4, 8, 9 論文がフランス語で、残りが英語である。本書の冒頭には、本書成立の経緯を述べる Preface がおかれ、末尾には索引とあわせて Millar の業績目録が添付されている。評者が数えた限りでは、10 冊の単著・共著、119 編の論文・書評論文が掲載

されている。他の偉大な古代史学者と比べると、Millar をとりわけ多産な学者ということはできないが（例えば、ハイデルベルク大学古代史・銘文学教授だった Géza Alföldy は、600 近い数の論考を著したといわれている）、後述するように、個々の仕事が及ぼした強大な影響力を考慮すると、この数はやはり驚異的といつてよいだろう。Millar の論文のうち特に重要なものは、3 巻本の論集（Hannah Cotton and Guy Rogers, ed. *Rome, the Greek World, and the East*. 2002-2006. Chapel Hill: The University of North Carolina Press）に収められている。

Benoist が第 1 論文で簡潔にまとめているように、Millar が研究対象としてきた問題群、そしてそれをなぞる本書の構成は、大きく三つにわけることができる。Millar が取り組んだ年代順に述べるならば、第一に、1960 年代から 70 年代にかけて研究された、皇帝を中心とするローマ帝国の統治システムに関する問題群。これに関する本書の論文は、第 4, 5, 6 論文である。第二に、1980 年代から 1990 年代に集中的に論考が発表された、ローマ共和政の民主政的性格に関する問題群。本書では、第 2, 3 論文で扱われている。第三に、主に 1990 年代以降、現在まで研究を継続している、ローマ帝政期から古代末期にかけての近東の政治、宗教、言語に関する問題群。Millar 自身の手になる第 7 論文、そして第 8, 9 論文が、この問題群に関係している。本紹介では、この三つの問題群ごとに、Millar の主張の特徴、さらに本書の執筆者自身の見解を、簡潔にまとめたいと思う。

カッシウス・ディオ（紀元 2 世紀後半から 3 世紀前半の政治家・歴史家）に関する博士論文（1962）からキャリアをスタートさせた Millar は、31 歳にしてローマ帝国の属州に関する一般書を編纂して後（*The Roman Empire and Its Neighbours*. 1966）、1977 年の *The Emperor in the Roman World: 31 BC-AD 337* に結実するローマ帝国統治システムの研究をおこなった。本書の第一の問題群である。Millar が提起した論点は多岐にわたるが、Eich 論文が的確に指摘するように、大きくは「請願回答（petition-and-response）モデル」にまとめることができる。これは、属州民からの様々な請願（例えば紛争解決や都市・個人の法的地位に関する請願）とそれにたいする皇帝の回答というコミュニケーションを土台とする行政システムを指している。Eich はこのシステムの特徴として、少なくとも建前上は皇帝が意志決定のすべてのプロセスに関与した点、属州民からの請願を起点とするシステムであるため皇帝の役割はあくまで対処療法的で受動的なものにとどまった点などをあげている。この請願回答モデルにたいしては、政治学的、社会学的な理論面での考察が不足している点や皇帝の受動的立場を強調する点に批判が寄せられたが、大筋においては、今日でも多くの研究者に認められているといつてよいだろう。Millar 自身は、既成の社会理論をア・プリオリにローマの行政システムに適用することを拒んだが（それゆえに上記の批判が出てきたわけだが）、彼が提示したモデル自体は、行政システムの比較史を可能にする潜在能力を持っている。Ma 論文は、請願回答モデルを作業仮説としながら、セレウコス朝シリアの行政システムを分析する。ただし、Ma は Millar を直接援用するのではなく、セレウコス朝にたいし Millar と同様のモデルを想定する、つまり王の行為、回答に基づいた支配者と被支配者の法的な関係を主張す

る Bikerman の *Institutions des Séleucides* (1938) を導きの糸とする。Ma は、ケース・スタディーとして前 2 世紀中葉のユダヤ人の反乱であるマカバイ戦争を取り上げるが、最終的な結論として、ユダヤ人の内紛（つまり被征服民による下からの問題提起）にたいし王が対応したとする Bikerman の見方を修正し、ユダヤ人にたいするセレウコス王の積極的な介入にマカバイ戦争の原因を求めている。この意味で、Ma は Millar や Bikerman の提唱する支配者の受動的立場に、一定の疑義を呈していることになる。Ando 論文においても Millar にたいする批判を見て取ることができるが、今回の批判点は、ギリシア世界からローマ帝国の制度を分析するという Millar の長年の基本姿勢の限界である。博士論文に基づくカッシウス・ディオに関する著作（1964 年）にすでに示されているように、さらにローマ共和政をギリシアの歴史家ポリュビオスに従って分析するという手法に明白に看取できるように（後述）、Millar の業績では、ギリシア語圏からローマ帝国を見る志向が貫かれている。これこそ、ギリシアとローマを総合的に論じることのできる偉大な歴史家の基盤なわけだが、Ando によれば、ローマ帝国の統治システムにはギリシア人（語）が理解できなかった重要な側面があるという。ローマ人は、移住、婚姻政策によって都市外の周辺諸民族を取り込み、市民権を与え、キウィタス（市民団、国家）に組み込んでいったが、自民族中心主義、ポリス中心主義に立脚していたギリシア人作家は、このローマのキウィタス概念を十全に理解することができなかった。彼らにとって、都市外民は常に野蛮人で、征服の対象でこそあれ自国に編入されるべき者達ではなかったのである。このような思考スタイルを持つギリシア語史料に拠る限り、ローマ帝国独自の公共性に肉薄することはできないというのが、Ando の見立てである。

第二の問題群、共和政の民主政的性格に関する論文に移ろう。1980 年代から 1990 年代にかけて、Millar は、ローマ共和政の中・後期の民主政的性格を強調する論考を立て続けに公表する。この時代は、ローマが地中海に覇権を確立する前 2 世紀のはじめから、帝政が成立する前 1 世紀末に重なるが、宣戦布告、条約締結、市民権拡大、穀物供給、農地改革、そして最終的に帝政成立へとつながる政治家個人への強大な権限の付与といった重要な意志決定の場面で、ローマ市に居住する一般市民による投票行為と、それに先だっておこなわれた公職者による弁論、説得活動が大きな役割を果たしたと主張したのである。従来ローマ共和政は、貴族が公職を独占し、一般市民との保護・被保護のクリエンテラ関係を掌握した全くの貴族政と考えられていたため、Millar の主張はドイツの学界を中心に激しい反発を引き起こした。Hurlet による第 2 論文は、Millar 学説の展開、そしてそれにたいする反論を丁寧にとどっている。一方、Pina Polo による第 3 論文は、投票に先だって公職者が市民に弁論で説得をおこなったコンティオ（集会）に関する自身の研究の紹介となっている。ただ、彼らの論考全体を見渡すと、第一の問題群に共通する、三つの論点が浮かび上がってくる。第一に、ギリシア世界からローマを観察するという姿勢。上述のように、Millar の共和政＝民主政論の出発点は、共和政中期の国政に民主政的要素を見いだしたギリシア人歴史家ポリュビ

オスの言説だった。第二に、支配者と被支配者のコミュニケーション。Millar が重視する、主にコンティオにおける政治指導者層と一般市民のコミュニケーション — 公職者による弁論とそれにたいする市民の有形無形の反応 — は、帝国行政における「請願回答モデル」の共和政の意志決定システムへの援用と考えることが可能だろう。このコミュニケーションの問題は、第三の論点、公共性の問題に深く関係する。上述の Ando は、ギリシア世界からローマ帝国を見た場合、帝国の公共性の特徴を見誤ると指摘したが、ともかくも、支配者と被支配者のコミュニケーション、そしてそれによって生み出される一定の共通認識に注目する Millar には、「公」の意志決定のメカニズムへの強い関心があるといっていよう。共和政研究における Millar の最大の功績は、共和政期ローマ市において当時の帝国を動かした公共性、政治指導者層と一般市民との共通認識が生み出される場、に注目したことである。共和政 = 民主政論の最大の批判者である Hölkeskamp も、民会やコンティオを実際の議論の場としないまでも、(政治指導者層主導であれ) ローマ人のコンセンサス形成の場と主張する限りにおいて、大きくは Millar 以降の学界動向に位置付けられる研究者であるように思われる。

第三の問題群は、ローマ帝政期から古代末期にかけての近東地域に関するものである。ただし、これはまさに今現在 Millar が研究成果を精力的に発表し、さらに、近東における帝国の統治システムのみならず、宗教、言語、民族といった多様なテーマに関わる分野なので、Millar による研究の意義を簡潔にまとめるのはほとんど不可能である。そこで、ここでは Millar 自身の手になる第 7 論文をガイドとしながら、彼の主要著作に触れるにとどめたい。自身が第 7 論文の冒頭で述べているように、Millar がローマ帝国下の近東に関心を抱く第一の理由は、宗教である。そこはラビ・ユダヤ教とキリスト教（最初にギリシア語による、そして 2 世紀以後はシリア語による）の揺籃の地であり、これらの宗教の強い影響のもとにイスラム教が誕生した土地なのである。1993 年に発表された *The Roman Near East: 31 BC-AD 337* は、この近東地域の重要性和その展開をアウグストゥスからコンスタンティヌスの死まで描いた労作である。しかし、この大著も現在の Millar には準備作業にしか過ぎなかったようである。彼の現在のプロジェクトは、コンスタンティヌスからマホメット（ムハンマド）までの近東地域における宗教、言語、共同体に関してであり、その全容は、近日刊行予定の *Religion, Language and Community in the Roman Near East: Constantine to Muhammad* で明らかにされるだろう。Yon による第 9 論文は、この研究プロジェクトに関連して、特に近東の言語状況に注目している。Millar によるローマ近東研究でもう一つの軸となるのが、テオドシウス 2 世時代（5 世紀前半）を描いた 2006 年の著作 *A Greek Roman Empire: Power and Belief under Theodosius II, 408-450* である。この著作は、ローマ帝国の東西分裂が事実上決定づけられたテオドシウス 2 世時代の統治システムを、皇帝（宮廷）と帝国民とのコミュニケーション — 請願回答、説得、文書のやり取りなど — から読み解くものである。この意味で、この著作も上に述べた第 1, 2 問題群と同じ系譜に属するが、本書で特徴的なのは、皇

帝のコミュニケーションの網にキリスト教会が入り込んだことである。Millar は、「正統」をめぐる教会の内紛を解決するために開催された公会議をも、帝国の文書行政と皇帝と教会とのコミュニケーションの文脈で理解している。Blaudeau の第 8 論文は、Millar による公会議史料の分析をまとめている。

以上が、本書の概要である。Millar の仕事の幅広さと影響力、そして多様な分野を扱いながらもそれを貫く理論的基礎を見失わない思考の強靱さには、驚嘆の他ない。また、共和政研究に見られるように、批判を恐れずに game-changing な研究を生み出す快活な知性にも、評者は感嘆を禁じ得ない。本書は、Millar の仕事を熟知する書き手の導きで、この偉大な古代史家の過去をたどり、未来を見渡すことのできる良書であるといえるだろう。